

Title	L. B. アルベルティの『家族論(Della famiglia)』と「家」の理想像
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 58 p.93-p.114
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80908
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

L. B. アルベルティの『家族論 (Della famiglia)』と「家」の理想像

イタリア語科

米 山 喜 晟

“I libri della famiglia” di L.B. Alberti e l'immagine ideale della famiglia

Cap. I L. B. Alberti scelse per il tempo dei dialoghi di questo libro, la primavera del 1421, quando suo padre era “grave di quella ultima infermità”. Dopo la morte gli cominciò la difficoltà economica per i comportamenti infedeli dei suoi parenti. Perciò a questo momento si sovrappose la crisi personale e economica alla crisi di famiglia in esilio che era già stata durata per più di venti anni. Mi pare che bisogna notare che le crisi doppie erano già finite tutte le due quando l'autore scrisse l'opera, perchè la famiglia era stata permessa di ritornare in patria nel 1428, e l'autore era stato nominato abbreviatore apostolico il 7 ottobre 1432. L'esperienza delle due crisi sovrapposte che duravano a lungo e si risolsero una dopo l'altra influenzò intensamente l'autore quando scrisse quest'opera.

Cap. II Gli interlocutori si possono dividere in due gruppi, cioè quello dei vecchi e quello dei giovani. I vecchi sono rappresentati come pratici e pieni di esperienza, mentre i giovani sono teorici e pieni di dottrina classica.

Cap. III I dati intorno alla Casa Alberti si possono dividere in tre gruppi, cioè quelli economici, quelli politici e quelli di articoli vari, che si trattano spesso del costume o della tradizione culturale. I dati economici sono più dettagliati e precisi degli altri e i dati del costume ci informano notizie preziose di questa famiglia, specialmente della tradizione intellettuale, ma tutti i tre gruppi sono troppo imperfetti per conoscere totalmente la famiglia. Per esempio, i dati politici sono troppo oscuri e scarsi e non ci informano nessuna notizia né della condizione politica della patria, né della situazione storica dell'esilio. Perciò questo libro deve essere considerato come un libro della teoria o dei consigli.

Cap. IV Alcuni esempi dei consigli.

Cap. V L'autore ci consiglia prima di tutto di ingrandire la casa e ci proibisce di dividerla. Egli ci consiglia di acquistare una villa e un podere

abbastanza grande per provvedere alla necessità della famiglia. Ci si riflette chiara la tendenza generale della rifeudalizzazione della società italiana, specialmente della classe del popolo grasso dopo la crisi del secolo XIV. Ma per causa dell'esperienza dell'esilio, in questa famiglia, il senso dell'isolamento dai nobili o dalla plebe si sente più chiaro e acuto. Per sopravvivere, la famiglia deve essere ben ordinata e ben sistemata, i giovani devono rispettare i vecchi, le donne devono sottomettersi agli uomini. I capi e i padri della famiglia devono dirigere e sorvegliare tutti i membri della famiglia, specialmente i servi e gl'impiegati. Ma insieme al rinforzamento dell'ordine interno della famiglia, l'autore vuole rendere la famiglia più razionale e quieta, proibendo la vendetta o le azioni passionali. Allo stesso tempo l'autore dà peso alla educazione e alla disciplina dei figli. In generale, i consigli alla famiglia sono difensivi e passivi, ma intorno all'educazione individuale sono più attivi e positivi. In questo contrasto, ci si riflette l'esperienza delle due crisi sovrapposte e risolte nella sua giovinezza.

第一章 舞台設定とその時点の意味

L. B. アルベルティの『家族論』は、序文を除くと、作者の父ロレンツォが亡命先のパドヴァで臨終の床についた時、見舞いに來たアルベルティ家の人々の間で交わされた対話という形式で成り立っている。ロレンツォが死去したのは、1421年5月28日のことなので¹⁾、死期を悟った彼が実兄と遺産の問題等について打ち合わせしているという状況から考えて、この対話が設定されたのは同年5月のある夕べとその翌日のことと見なしうる。すなわちその夕べの内に第一部と第二部の対話が行われ、その翌朝に第三部、その後の正餐のデザートから食後にかけて第四部が語られているわけである。といっても、第一部が96ページ、第二部85ページ、第三部134ページ、第四部107ページ（エイナウディ版²⁾による）、日本語に訳すと四百字詰原稿用紙1000枚をゆうに越す長さの著作なので、勿論実際に一昼夜で語り尽せる量ではないが、とも角その対話はこの時点に設定されているのだ。ところでこの時点には2つの意味がある。その1つは当時アルベルティ家がアールビツィ家を中心とするフィレンツェの支配勢力との政争に敗れ、故国から追放されて各地に亡命しており、たまたまロレンツォの病いを機として久しぶりにパドヴァで再会したということ³⁾、もう1つは彼が17才だった時起ったこの父の死に基づき、作者自身の人生の苦闘が始まったということである⁴⁾。前者、つまり一族が亡命中であるという事実は、対話中何度も語られるので見落される氣遣いが無いが、後者は、冒頭でロレンツォが2人の親戚に遺児の世話を求める箇所等いくつかの部分を除くと、ともすれば忘れられ勝ちである。しかし私はこの舞台設定の背景となっている父の死こそ、貧困と病いに苦しめられたと伝えられ、事実初期の諸作品にペシミスティックな性格を顕著に与えることになった、作者自身の青年期の危機⁵⁾の出発点であったという事実を軽視してはならないと考えるのである。

ちなみに作者 L. B. つまりレオン・パッティスタ（レオンの名は後で追加された）は、フィレ

ンツェ屈指の名門アルベルティ家の商人ロレンツェが、1404年に亡命中のジェノヴァで、ボローニャ出身の未亡人に生ませた私生児⁶⁹で、当時の習慣通り、やはり私生児の弟カルロと共にアルベルティ家に引き取られ、父の許で育てられた。その後1408年に父は L. B. の母親とは別の婦人と正式に結婚するが、正妻との間に子供はなく、2人の兄弟は父の嗣子として立派な教育を与えられていた。実際パドヴァ時代の恩師ガスパリーノ・ダ・バルジッザ (Gasparino da Barzizza)⁷⁰は、この時代のすぐれた人文主義的教育者の1人であった。その後彼はボローニャ大学に学び、対話当時は同大学に在学中で法律を学んでいた筈である。ところが父の死後、遺児の後見人となる筈の伯父のリッチャルド (ロレンツォの兄) がその翌1422年に死去するなど不幸な事情も重なり、また恐らく一族の期待に反して L. B. が実業に入らなかったためと思われるが、ロレンツォの遺産は L. B. の手に入らず⁸⁰、そのため彼は学究生活を続けていくのに貧窮で苦しめられたと伝えられている。勿論当代一流の富豪の一族のことなので、どこまで文字通り受け取るべきかは分らないが、彼の進路に対する親戚の無理解や、遺産をめぐる不信感などは、青年期の彼を相当苦しめたようで、彼は神経性の病気を患い、将来に不安を抱いた時期もあったらしい。その苦悩は、時にはレオパルディにも比較される程⁹¹ ペシミスティックで冷笑的な気分を彼の初期の作品に与えているとされている。

しかしこの作品そのものからは、そうした厭世あるいは冷笑的な気分は、完全に払拭されていると言える。つまり作者は、この作品を書いた時には、青年期の危機をすっかり克服しているのである。作者はこの作品の第一～第三部を1433～34年にかけての約半年間で、かなりのスピードで書き上げ、第四部だけはずっと遅れて、1440年に執筆した¹⁰⁰とされている。ところで、1428年にフィレンツェ共和国ではアルベルティ家に対する追放令が解除¹¹¹されており、前半が書かれた時期には、すでに一族は祖国に復帰している。また L. B. 自身も1432年10月7日付で教皇エウゲニウス四世によって abbreviatore apostolico¹²⁰ (教皇勅書起草官) に任命され、あわせてフィレンツェ管区内のシーニャで聖職禄を得て、教皇庁の上級事務官僚としての地位と、人文主義研究を続けるための地歩を確立している。だから作者が一気に第一～第三部を書き上げた当時、作品の舞台の背後に暗く垂れこめている2つの危機は一応の解決を見ているわけである。常識的に考えると、1433年当時まだ29才であった筈の L. B. が、「家」などという経験と分別を要する主題に正面から取り組んだという事実には多少意外な感じを受ける。勿論当時は今日と比較にならぬ程早く老成したわけだが、その点を考慮しても (作品中の29才のリオナルドの扱いを見れば明らかな通り)、やはり作者の若さは気になる。しかしここで作者が一族の危機と自分の危機を二重合わせに、ほとんど一体として感じていたと仮定するならば、「家」の危機が一応解消し、自らの危機の一大要因が解決されて間もないこの時期にこそ、作者はこの作品に熱意をもやしたという事情が了解できる筈である。F. Tateo は、必ずしもこの作者は、ブルクハルトがいう程冷静ではないと指摘するが¹³⁰、たしかにこの作品は、冷静で円熟した思索の中から生れたというよりも、むしろ少くともその第一～第三部は、青年期特有の内的衝動に駆られて書き進められたと見る方

が妥当なようである。

とはいえ、あくまで本書の主題は「家」であり、作者がその序文で「諸君は彼ら（アルベルティ家の先人）から、いかにして家が大きくなるか、いかなる手腕によって家は幸運や至福に恵まれるか、どういう理由で神の恵みや人の好意と友情にあずかれるか、家族内でのどういう教育によって名誉や名声や栄光がふえかつ拡がるのか…（略）等々のことを学ぶであろう¹⁴⁹」と予告しているように、本書は「家」を繁栄させるための指針として書かれている。しかしその根底にある「大抵の場合、人間こそ自分の全ての幸福と不幸の原因である¹⁵⁰」という人間の責任能力に対する信念や、「徳性(Virtù)が運命にかなわないと判断しうる程、強力な支配力を運命にみとめうるような事柄は何もない¹⁵¹」という人間の徳性によせる信頼感などは、彼が青年期に二重の危機の解決をわが身で体験したと切り離しては考えられないように思われる。青年期の作者の内部では、2つの危機が混然一体となって彼を苦しめており、必らずしもはっきりと区別されていなかったのではないかと思われる。しかもほぼ4年以内に相次いで一応の解決を見ているため、2つの危機は彼の内部で一そう一体として感じられた可能性が大きい。すでに記した通り、彼の初期の作品には、自らの体験が反映されている場合が多いので、当然この作品においても、そうした反映を認めるべきであろう。だから「家」の危機は自己自身の危機と一体化して感じられ、それ故にこそ切実な自己の問題として彼はその解決について論じたといえるのではないだろうか。

第二章 対話者たちについて

まず第一～第四部の対話者とその話題を簡単に示すと、作者の序文のあと、第一部で作者の父ロレンツォが見舞に來た同族のアドヴァルド（以下 Adv. と略）とリオナルド(Li.)に、同席する2人の息子バッティタ（作者=Bat.）とカルロ(Ca.)の将来の保護を頼むと共に、父親の心得を語ることから対話が始まる。医師の忠告でロレンツォを除く4人は広間に席を移し、Adv. と Li. の2人が対話を続けるが、主に Li. が父親の子弟に与える教育について論じ、年長の Adv. がそれに反論したりコメントを加えたりする。やがて Adv. が退席して第一部が終る。

第二部は、第一部の続きで、Adv. に代って Bat. が議論をしかけ、恋愛至上論を述べるが Li. が簡単に論破、さらに Li. は2人の兄弟のために、一家繁栄のために取るべき4つの方針を示し、結婚をどう行すべきか、また一家の生命を保ち、人数を保つ方法、いかにしてお金をもうけるかについて論じ、家業の金融業を弁護し、一族の富を自慢する。

第三部は、その翌朝、前日同様 Li. と Bat. と Ca. の3人のいる所へ、一族の長老ジャンノット(Gi.)がリッチアルドに会いに來て会いそびれたために、Li. の求めに応じて話し始め、主に「儉約(masserizia)」について語り、ついで別荘と農場の経営、および事業経営の秘訣を説き、自分が行った夫人の教育を述べ、途中から Adv. も加わって財産管理について論じ合う。

第四部は、前第一～第三部に比してかなり劇化されており、その点では作者の円熟が感じられるが、古典からの引用がやたらとふえ、対話はやや形式化しているようであり、第一～第三部の

内的な表現欲が希薄化しているような印象を受ける。それはすでに危機のほとぼりがさめて久しく、前半の切実な問題意識が弱まったためではないだろうか。第四部は正餐を用意した忠実な老料理人 Buto のあいさつに始まり、続いてやはり一族の長老の1人であるピエロ (Pi.) が三人の君主との交際という華麗な経験談を語り、その後席を広間に移して、第一部と同様 Adv. と Li. が友情のあり方について論じ (ただし今度は Adv. の方が主な語り手)、Bat. と Ca. の兄弟がこれに耳を傾ける。

以上を図表にまとめると次の通りである (ただし○印は主な話し手、ページ数はエイナウディ版による)。

主な対話者(○印は主な話し手)		聞き手
第一部	○ Lorenzo (pp. 15-33)	Adv., Li., Bat., Ca.
	Adv. — ○ Li. (pp. 33-98)	Bat., Ca.
第二部	○ Li. — Bat. (pp. 99-183)	Ca.
第三部	○ Gi. — Li. (pp. 191-295)	Bat., Ca.
	○ Gi. — Adv. — Li. (pp. 296-318)	Bat., Ca.
第四部	○ Piero (pp. 321- 346)	Gi., Ricciardo, Adv., Li., Bat., Ca., Buto (料理人)
	○ Adv. — Li. (pp. 347-425)	Bat., Ca.

問題は第一～第四部を通しての人物の一貫性であるが、第四部のみがかなり遅れて書かれ、主題も従来と若干異った性格の「友情」を扱うなど、対話全体に若干の変化が生じているにもかかわらず、対話者の間にはほぼ一貫性がみつめられるといえそうである。その最も顕著な例は、第三部で「儉約」を説いた Gi. が、第四部の Pi. のことばを聞いて、狩猟の無駄さ加減を説いて Pi. や Li. の反対をうけたり、また Pi. が教皇の許を立去ったことをほめて君主から遠ざかれという第三部の主張を反復しているなど、いかにも Gi. らしい発言を述べていることである。また Li. も全体を通じて、理想主義的な友情を奉じており、一応の一貫性がある。

そこで参考のために対話者たちの人物を簡単に眺めると、作者の父ロレンツォ¹⁷⁾ は、生年は不明だが、1387年父メッセル・ベネデットが追放されたころ、早くも公民権を停止され(ammonito) ているので、死亡当時多分50才前後の老練な商人兼銀行家で、子弟の教育にも十分熱心であった。

他の対話者と作者との続き柄は別表の通りである。Adv.¹⁸⁾ は、アルベルティ家一族であると共に、リッチアルドの娘カテリーナと1411年に同族結婚しており、当時1男2女の父で対話の年には45才以上、対話の様子から相当の読書人で、Li. と気の合う議論相手だったことが明白だが、対話の翌1422年に世を去っている。

第一～第四部を通して、一貫して対話に参加した Li.¹⁹⁾ は、1392年生れ、作品執筆当時の作者

と同じ29才で、古典にくわしく、新しい人文主義世代の代弁者であるが、1428年以前に没したという。Bat. がこの人物に「私たちはあなた (tu を利用) の心安さと親切のため、いつもあなたを兄と見なしていて、そのおかげであなたから物事に関する完璧な理論と認識を得て来ました²⁰⁾」と述べているように、作者と親しく、影響力を及ぼした人物として描かれている。対話当時独身のこの人物が17才の Bat. 相手に結婚について論じているのはやや不自然な感じもする。ただし相当医学知識が豊かなので、彼の説は今日の医師の助言のように受入れられたのかも知れない。

なお第一～第四部を通して Bat. と共に聞き手に加った Ca.²¹⁾ は、終始沈黙しているが、生年等不詳、対話の様子では明らかに Bat. の方が兄貴株である。しかし Bat. と同年令（つまり双生児）という説もある。1428年に一族と共に帰国したらしいが、何をしていたかは不明。対話当時は Bat. と同じボローニャ大学に在学していたようだ。

第三部の主要な語り手 Gi.²²⁾ は、1357年生れなので対話当時63才前後、勿論一族中の長老だった。自ら述べている通り若いころから学問を行わず実業に加わり、経験主義者²³⁾を自任する。また一族がフィレンツェにいたころから一切政治に参加せず、1401年に一族に連座して追放されたが、政治嫌いのおかげで、一族中彼のみが1413年に、フィレンツェとの取引きを許されている。帰国後はメディチ体制下で政治に参加している。

第四部の冒頭で、Pi.²⁴⁾ は、ミラノ公ジャンガレアツォ、ナポリ王ラディスラーオ、ピサ派教皇ヨハネス二十三世との個人的な交際を語っているが、Gi. と同年の生れ、ただし全く対照的な性格で、当時の宮廷や貴族社会に出入りする「洗練された老練な外交官²⁵⁾」であった。武芸、狩猟、君主相手の談判にも長じ、ブオナッコロソ・ピッティなどにも似た人物だった。

対話者同志のことは遣いを見ると、年長者の Gi. と Pi. は互いに tu でしゃべっているようだ。Pi. は登場期間が少いのではっきりしないが、Gi. は年少者には勿論 tu を用いる。他方 Adv. は Gi. に voi. を用い、Li. は Gi. にも Pi. にも voi を用いる²⁶⁾。

一方 Li. は16才年長の Adv. には tu を用いる。Bat. は Adv. に対しては不明だが、Li. に対しては tu. を用いる²⁷⁾。以上の結果を、全巻を通じて対話に加わった Li. を中心にまとめると、Adv. 以下には tu, それ以上の人々には voi を用いている。

以上をまとめると、対話者は Gi. と Pi. そしてほとんど対話に加わらないがリッチェルドからなる長老組と、中年の Adv. 以下の若手組とに分れる。長老組は、Gi. に代表される経験主義者、Adv. 以下はあらゆる機会に古典を引用する人文主義的教養の持主として描かれている。もっとも Gi. の説もクセノポーンの『農場管理論²⁸⁾』などを下敷きに行っているとされているので、必ずしもその説は経験とはいえないかも知れないのだが、作者は長老組を経験主義者として描く。

なお、ロレンツォが語り、Li. の態度にも表われているように、当時は長幼の序が礼儀作法としてきびしく要求されていたとされている²⁹⁾。したがって対話の際にも年長者に対する態度はきわめて丁寧である。だから、議論に際してそうした礼儀が影響を及ぼしたかどうかは仲々微妙な問題である。その可能性が全くないとは言いきれない。しかしそれ以上に、話し合っている人々

が、全く異った次元で論じているために、議論がうまく噛み合っていない場合の方が多いようである³⁰⁾。いずれにせよ、この対話においては、プラトンの対話篇におけるソクラテスにあたる人物は存在しておらず、学識豊かな Li. は経験が不足し、経験豊かな Gi. は無学を自他共に認めており、その両方を兼ねそなえている筈の Adv. も、やはり両方が若干不足している。だから意見が対立すると、権威ある判定役は存在しない。しかし問題が問題だけに、本来自然科学のように正否が定め難いことも考慮すると、作者のこうした一見投げやりな論理のはこびにも、それなりの配慮の跡をみとめるべきであるだろう。

第三章 作品に描かれたアルベルティ家

すでに見た通り、本書では第四部の冒頭に少し登場して道化役を勤める忠実な料理人ブートを除くと、登場人物は全てアルベルティ家の男達である。だから極端な言い方をすると、全篇何らかの形でアルベルティ家と関係があるといえる。しかしもう少し具体的な形で、本書がどの程度アルベルティ家の実態を教えてくれるかについて検討してみることにしよう。読者はあのフィレンツェの名家の人々が内輪で「家」について論じている以上、余程くわしくアルベルティ家の現実の姿を知ることができると期待するのは当然であり、近年相次いで出版された2冊の英訳本もそれぞれ『ルネサンス・フローレンスの家族³¹⁾』とか、『フローレンスのアルベルティ家—レオン・バッティスタ・アルベルティの家族論³²⁾』という、そうした期待にいくらかおもねった感じのする標題をつけて売り出している。しかし率直に言って、これらの標題は誤解を招きやすい。むしろそうした標題はドナード・ヴェッルーティの『家族年代記³³⁾』や、ジョヴァンニ・モレッリの『家族の記録³⁴⁾』などにこそふさわしいもので、次章で見る通り、実際にはこの作品の主な内容は、一般的な家族に関する論議であり、家族を繁栄させるための指針を論じたものである。

といっても、本書の中にアルベルティ家の記録がないわけではない。序文でも記されているように、本書の立論の根拠はギリシア、ローマの古典と共に、アルベルティ家の歴史である以上、当然今までの一族の体験は本書の中に反映している。しかし一族の歴史が直接的に物語られている箇所は、古典からの引用と比較すると、全く取るに足らぬ位少ないのである。参考のためにそれに該当する箇所を眺めてみよう。2冊の英訳書には共に索引がついていて、R. N. Watkins の訳には、Alberti, family history の項が8ヶ所、G. A. Guarino の訳には Alberti family, history の項が25ヶ所上っているが³⁵⁾、より網羅的な Guarino によって列挙してみよう。(ただしページ数はイタリア語のエイナウディ版による)

1. 序文中で、作者がアルベルティ家は逆境に勇敢かつ冷静に立ち向ったと賞讃 (p. 4).
2. 同じく序文中で、作者が本書でアルベルティ家の良習を伝えて、一族に貢献したいと抱負を述べる (pp. 12-14).
3. 第一部で、ロレンツォが、ロードス島でその父メッセル・ベネデットによって、一家の運命の予言がなされたことを語る (pp. 24-25).

4. 第一部, ロレンツォがアルベルティ家の若者の行儀の良さ, 長幼の序が守られていることを語る (pp. 28-30).

5. 第一部, Li. がアルベルティ家のすぐれた学問的伝統を, 具体的に名前を挙げて述べる (pp. 83-84).

6. 第一部, Li. は Adv. が世界各地と手広くこまめに連絡を取りつつ勤勉に事業を行っていることを賞讃する (p. 90)

7. 第二部で, Li. が Adv. の現在の状況を語り, アルベルティ家そのものが各地に分散していることを嘆く (p. 101).

8. 第二部, Li. は, アルベルティ家の過去の繁栄を考えることによって慰めをえていることを語り, またその姿を回想しつつそれにもとづいて, 幸福な「家」となるための4条件を考える (pp. 124-25).

9. 第二部, Li. が, アルベルティ家には魅力的で新鮮な名前をつける習慣があると語る (p. 142).

10. 第二部, Li. は, アルベルティ家が主として外国で正直に金融業を営み, その富はフィレンツェ (そこは富が永続させぬところだとする) には珍しく永続きしたと語る (pp. 172-73).

11. 第二部, Li. はアルベルティ家がフランドルから大規模な羊毛の輸入を行ったという故事を述べ, また一族は従来そうした危険を伴う大事業を営んで来たが, 将来もそうするだろうと述べる (p. 178).

12. 第三部で, Gi. が, アルベルティ家の人々は武芸にすぐれ, 馬上槍試合に出場して市民の讃辞を独占したと語る. ただし Gi. 自身は老人にとめられて参加できなかったと回想する (pp. 193-94).

13. 第三部, Gi. が儉約すべき3つのもの (精神, 肉体, 時間) について教えを受けた状況を説明, その時の会合や, そこへ集った人々の間の統柄, また彼らがいかに偉大であったかを語る. あわせてアルベルティ家からは, 市庁舎建設に貢献した人物をはじめ多くの人材が出て, 市のために尽力したことを語る (pp. 209-12).

14. 第三部, Gi. はアルベルティ家の不幸が予想外に長引いたこと, しかし復讐の意志はないことなどを語る (pp. 216-17).

15. 第三部, Gi. が引越しに大損害が伴うことを力説, Li. も自己の亡命体験からこれに同意する (p. 229).

16. 第三部, Gi. がアルベルティ家の先祖が所有していた, ほとんど自給自足の可能な程広大な土地と城のような別荘のことをなつかしむ (pp. 237-38).

17. 第三部, Li. が先祖たちが援助した多くの教会や修道院の名をあげる (p. 257).

18. Guarino は, 第三部中で Gi. が語った, 彼自身の妻に対する教育とその成果 (英訳書の pp. 216-37) を一括して1個の項目として挙げている (pp. 267-95).

19. 第三部, Adv. が, 財産は貨幣で持つのが便利だと主張, アルベルティ家は不動産に投資しすぎていたため, 追放後不自由したと指摘 (p. 300).

20. 第四部で, 料理人ブートがあいさつに出て, アルベルティ家の人々が以前も議論を好んだことを回想する (pp. 320-21).

21. 第四部, Pi. はミラノ公の信用をえて, 一族の便宜をはかったことを語る (p. 333).

22. 同じく Pi. は, 世界各地に広がる一族の情報網を利用して, 新しい情報をミラノ公に伝えて喜ばれたことや, 彗星の出現におびえる公を安心させたことを語る (p. 334).

23. 第四部, 教皇ヨハネス二十三世が一族に突然8万フィオーリーノの大金を調達させていやがらせをした時, Pi. はそのお金を届けに教皇の許に出頭し, これまで一族が行った教皇庁への貢献ぶりを語って, 教皇に速回しに抗議する (pp. 342-3).

24. 第四部, Adv. は, メッセル・ベネデットが傭人の1人が食卓で示したパンくずを投げた仕種から, その賭博癖を見抜き, 外国への派遣を取りやめた故事を語る (p. 367).

25. 第四部, Li. はアルベルティ家の一族に, Adv. の友情に関する教えを守る気のない, 不心得者がいることを嘆く (p. 380).

なお, 上記の項目中には, Watkins 索引の8項目が全部含まれていて, かなり網羅的であるといえる. だがアルベルティ家に関する本書の記述はこれに尽きるものではない. たとえば「まことに私は, 君たち少なからぬ数のアルベルティ家の若者が, 後継ぎもなく, 可能なだけ家族の人数をふやしておらず, にぎやかにもしていないことをとても悲しんでいるのだ. 一体何を言わんとしているかだって. それは数ヶ月前私が数えてみたところ, 16才未満でもなく, 35才を超過してもいない, 何と22人ものアルベルティ家の青年たちが, 結婚もせずに独り暮らしをしているということだ³⁶⁾」という, 第一部で Adv. が独身の Li. 相手に話したことなどは, この当時の一族の状態を示す貴重な証言ではないだろうか.

なお上にあげた数字による説明は, 前述第10項の一部である「わがアルベルティ家の人々は, 常に祖国の必要に対して, 少なからず役立ってきた. 当時祖国が出費したお金を32等分すると, 常にその1つ以上 (つまり総支出の32分の1以上) をわが一族が支払って来た³⁷⁾」という記述などと共に, どちらかというと例外的な記述だといえるだろう. むしろ多くの場合には前述第19項の Adv. の説に対する反論として Gi. が述べた「わがアルベルティ家の金は, 何と多くの破産者, 海賊, 追い剥ぎ達を満足させたことよ³⁸⁾」(この部分も Guarino の索引にはない) のような, 曖昧な記述で済まされているのである.

さらに前記の索引には, Pi. が2匹の犬で狩りの途中危険に会ったナポリ王を救ったことや, その犬の出所は一族のアリーゾ (ルイーゾ) で, そのアリーゾはグラナダ王から武芸に抜群だったための褒美としてそれらの犬を与えられたこと³⁹⁾ 等, 丹念に探せばなお何ヶ所か追加を加えることが可能だろう. しかし大体の所, 前述の諸項目で, 本書におけるアルベルティ家に関する記述の主要なものは把握されていると見て差支えなさそうである. その内, 主にアルベルティ

家の経済について触れた箇所は、第6, 8, 10, 11, 15, 16, 18, 19 (およびこれに対する Gi. の反論), 23など (他の項目にも関連したものが全くないわけではないが), 全体の3分の1をこえていて、量的にも多く、またもっとも力をこめてくわしく語られていると見なしうようである。たとえば、「わがアルベルティ家で、ただの一度に、フィレンツェの全ての生地屋のみならず、トスカナ地方の大部分にとっても十分な程大量の羊毛をフィアンドラ (フランドル) の果てから陸路で運ばせたことがあったが… (略) それら大量の羊毛には、かりにも運命の手が及ばなかったのだろうか。それらが安全な場所に収まるまでに、どんなに多くの危険と、川と、困難を越えて来たことか。泥棒、暴君、戦争、不注意、代理人の不正等々、あるいはそれに類した事柄が、あらゆる方面で、それらの商品をたえず危うくしたのだ⁴⁰⁾」とか、「私はわがアルベルティ家の人々が、他のあらゆる正しい人々と同様に、この金融業に永年にわたって、西方諸国並びに世界中の様々な地方で、常に正直に完璧に従事できたことを知っており、…(略)。我々の一族の人々はあらゆる契約において最高度の単純さと真実とを守ることを望み、そうしたやり方でイタリアの国内でも、イタリア国外、つまりスペイン、西方諸国 (フランス、イギリス、フランドル等々のこと)、シリア、ギリシア、その他あらゆる著名な大商港においてもやって来たのだ。(略)一族の長老の記憶でも、あるいは一家の帳簿を見ても、アルベルティ家にはこの上なく偉大で、名高く、正直かつ善良で、非の打ち所のない商人を欠かしたためしがない。また我々の祖国フィレンツェでも、わが一族の場合ほど、規模が大きく、長期に続き、しかも非難を浴びなかった富は比類がないことを見出すだろう。それどころか、我が祖国においては、唯一つわがアルベルティ家の場合を除くと、いかなる莫大な富も、孫の代までは続いていないように思われる。⁴¹⁾」等の記述から、作者が一族の富と、事業における公正さとにどんなに誇りを抱いていたかを読み取ることができるのである。またそれらの記述がほぼ真実であったことが Saponi によって裏付けられている⁴²⁾。

それに比較すると、政治 (あるいは追放) に関する記述は、第1, 3, 7, 8, 13, 14, および21の後につづく (索引には含まれない) Pi. とミラノ公の問答など、触れられている箇所は決して少くはないが、すでに遠い過去のすぐれた先祖への讃辞をのぞくと、その触れ方が実に簡単で、残念ながら、何故追放されたかとか、政敵は誰だったなどという具体的な事柄には全然ふれられていない。むしろこの場合に注目すべきは、一族そのものの歴史には関連していないが、第三部において公職につくことをきびしく批判した Gi. の説とそれに対する Li. の反論だろう⁴³⁾。

政治に関する記述が著しく曖昧で短いのに対して、一族の習慣、伝統など、広義の習俗に関する記述は、第2, 4, 5, 9, 12, 13, 16, 17, 18, 20, 25等々、いずれにもくわしく、内容が充実していて興味深い。その内でも圧巻は、紙数の都合で省略せざるをえないが、第5項のアルベルティ家の学問の伝統に対する讃辞である。また第16項のアルベルティ家の先祖たちが所有した別荘についての記述は、この一族の持つ小領主的性格をも裏付けているといえよう。

こうした興味深い記述にもかかわらず、本書におけるアルベルティ家像は、残念ながら一個の

まとまったものとは言い難い。最もくわしい経済的側面の記述すら、そこからこの一族の経済活動を再構成することは不可能である。またこの作品より少し以前に書かれたフィレンツェの多くの家族年代記は、たとえ粗末な形であるにせよ、一応自分の一族を、さかのぼりうる時点までさかのぼり、時には簡略ながらも、一応の人脈を知らせてくれる。ところが本書には、そうした意図は全く認められない。先祖たちはエピソードのついでに恣意的に取り上げられているだけである。第13項で多少統柄の解説なども行われるが、それは一族のほんの一部分に触れているだけに過ぎない。といっても、別にそのために本書を批判しようというつもりはなく、ただ本書が家族年代記の類とは性格が違うということを明らかにしておきたいのである。とはいえ、礼儀、名前のつけ方、馬上槍試合への参加ぶり、武芸にすぐれた人が多かったこと、教会や修道院への寄進、あるいは世界各地に広がっていた情報網等々、貴重な資料が盛り込まれていることを認めねばならない。Gi. や Pi. の経験談全部が、この当時の上流市民の生活を生き生きと描いた興味深いドキュメントとして珍重すべきものだ。とはいえ、ここに描かれたアルベルティ家は余りにも美しすぎるともいえる。内部からの批判は第25項に少し述べられているだけで、他は全て一族への讃辞か、郷愁に充ちた回想である。家族年代記に精彩を添える落伍者や破産者の記録もない。だから作者は本書によって一族との関係修復を試みたとする論者さえいる⁴⁰程である。だが必ずしもそこまで考える必要はなく、ただ亡父につながる一族への愛情が発露したものと見なすことも可能だろう。しかしこのように、ほとんど一面的にその歴史や習俗を美化しえたということは、すでにこの一族には昔日の生命力はなかったともいえるわけで、事実この一族は帰国した後もかつての勢力を挽回することができず、メディチ家の支配体制の下に唯々諾々と組みこまれていったようである。

第四章 「家」のあるべき姿と採るべき方針の実例

本書の対話の主題については、すでに第二章で簡単に概観したが、基本的には各部に1～2人の主要な語り手が自らの意見を述べるという極めて単純な構成でありながら、詳細に眺めると要所に対話を進めていくための巧妙な仕掛けが施されており、対話の相手の催促や質問や反論などが時には対話の流れを変えたり、反転させたりしながら単調なモノローグに陥ることから救い、しかも最終的にはなめらかに対話を進めるのに役立っていることが理解される。そうした対話の進行上重要と思われる主要な箇所を拾い上げると次のような点になるだろう。

① p. 20 で、ロレンツォがその父メッセル・ベネデットから聞いたという、父としての心得を話し始める。以下、これがきっかけとなって、「家」のあるべき姿、採るべき方針についての談議が始まる。

② p. 38 で Li. が Adv. の挙げた父親の苦労の実例に反論し、それがきっかけで、独身者の Li. が経験者の Adv. に教育論を説く。

③ p. 74 で Li. が自説を批判して訂正してくれるよう Adv. に頼む。対話形式の確認。

④ p. 100 で、Adv. が去った後、Li. が Bat. に、一族内の議論の習慣を教え、Bat. がそれについて自分の未熟な恋愛至上論をとる。

⑤ p. 120 で、自説を論破された Bat. が Li. に「家」にとって有益なことを教えてほしいと求める。

⑥ p. 195 で、Li. は儉約と吝嗇との相違をたずねて、Gi. に儉約論を語らせる。

⑦ p. 228 で、Li. は Gi. にもし Gi. が自分の年で妻子があったらどうするかという仮定の質問を行って、家屋敷の選び方、別荘のすばらしさ、自給自足のすすめ、さらに事業のすすめ方までを語らせる。

⑧ p. 266 で、Li. は Gi. の妻をほめて、Gi. が行った妻の教育方法を聞く。

⑨ p. 295 で、Adv. が Gi. に貨幣第一主義をぶつけて Gi. と論争する。

⑩ pp. 327-28, Li. や Gi. がけしかけて、Pi. に3人の君主との交際を語らせる。

⑪ p. 347, Pi. が古典中の友情論に不満を述べ、Li. がはげしく反論。その結果 p. 368 以下で Adv. が実践的友情論を展開する。

以上の経過を見ると、やはり病床のロレンツォが子を思う心から述べ始めた父親論が、全体に大きな影響を及ぼしていることが分るであろう。勿論途中には体験談や見聞記のようなことばや、古典からの引用も多数入り込むが、基本的には「家」はいかにあるべきか、また「家」を繁栄させるためにはどのような方針を取るべきかという論議に終始するわけである。だから、「リオナルドよ、何事であれ、わが一族にとって有益な事柄について、我々にもっと教えて下さることがあなたの任務です⁴⁵⁾」という Bat. の催促や、Li. が Gi. に対して行なった「ところで、あなたのお教を完全にするためにお願いするのですが、もし仮にあなたが私の年令であり、妻子がいて、あなたと同様分別と経験があり、真の経営者(massaio)として生きるためにすっかり準備がととのっていると仮定してみて下さい。あなたはどんなやり方で物事を運営されるでしょうか⁴⁶⁾」という質問こそ、本書の基本的な問いかけであり、それに対する解答が本書の主要な本体であると断定して差支えなさそうである。要するに、「家」のあり方と採るべき方針が語られてゐるのである。それではそれはどういうものかを、主要なものを拾い上げて列挙して見たい。

(1) ロレンツォの説くあるべき父親像

「父親のつとめは、世間のいうように家の中の穀倉と揺かごの中を一杯にしておくことにとどまらない。彼は一家の長として万事により目を光らせて監督すると共に、家族たち全員をよく見回して理解してやらなければならないし、家の内外の全ての慣習をよく吟味して、どんなものであれ感心できないものがあれば、頭ごなしに叱りつける代りに、道理を説いて聞かせねばならない。権力をふりまわすのではなくて、威厳にものをいわせ、必要な際にも、命令を下す代りに助言を与えるようなふりをするのだ。ただしそれがどうしても必要とあれば、きびしく、厳格に、情容赦なくふるまうべきだ。家族全体を徳と名誉とによって立派に導くためには、まるでそのことが自分の一切の能力と知恵を向ける唯一の目標でもあるかのように、自分の家族全体の幸福

と平穩無事とを、あらゆる思考の中で優先させねばならない。また（世論の）風向き、つまり市民たちの間での人気の波や好意などに乗かって、名譽、賞讃、權威などをつかみ取るすべを知っていないてはならないだろう。その場合うまく時流に合わせて、帆を固定したり、ちぢめたり、拡げたりできる必要がある。またわが一族がすでに22年もの間、不当に耐えて来たような惨めな非運や逆境においても、若い人たちの精神を支え続け、彼らが運命の猛威を前にして絶望したり、倒れたきりあきらめてしまったりしないように、配慮せねばなるまい。また同時に、それとは逆に復讐をしようとか、それ以外でも何か青くさい、軽はずみな信念を実現させようなどと考えて、若者たちが軽率で気狂いじみた計画を企てたりすることを、決して許してはいけない。たとえ運命の空模様が晴天で風が吹いている時でも、そして嵐の時には尚更のことだが、理性的で正しい生き方という航路から、舵をそれさせることは絶対に禁物である。⁴⁷⁾」

（2） Li. の説く男子の教育 (Adv. 相手)

「したがって男の子は、幼いころから、悪徳よりも徳性を学べるように、男たちの中で暮らすことに馴れさせるべきです。うんと小さい時から、その年令として可能なかぎり、すぐれた偉大な事柄に馴らし、かつ訓練することによって、男らしくふるまうことを始めさせ、またあらゆる女性的な習慣や態度を、彼から取り除くことが望ましいのです。ラケダイモン人たちは、自分の息子たちに夜間の闇の中で墓地を歩かせ、老婆たちの魔法やおとぎ話におびえたり信じたりしないように訓練したものでした。彼らは、思慮深い人なら誰も疑ったりしませんが、習慣がどんな年令でも効力を持っていることと、おそらく青春の初期には他のどの時期よりも一そう効果を發揮することを知っていたのです。幼いころから男らしく偉大な行為の中で育てられた子供は、その年令に不相応な荷の勝ったものでないかぎり、どんなに立派な仕事であろうとも、軽いもののように感じて、困難だとは見なさないでしょう。だから子供たちには、まず手ははじめに骨の折れる困難な事柄に馴れさせ、そこで粒々辛苦の末に、本物の賞讃や拍手喝采を求め期待させることが望ましいのです。こうした点で、彼らの身体と知能とを訓練することが有益です。⁴⁸⁾」

「子供たちにとって、真先に役立つものが学問に違いないことを誰か知らない人がいるでしょうか。学問は何よりも優先すべきものなので、どんな貴族であろうと、学問がなければ田舎者だと見なされざるをえないほどなのです。私は、貴族の子弟たる者は、鷹よりも本をたびたび手にしている所を見たいものです。また世間のある種の人々の間で広く行われている、自分の名前が書け、自分の取り分として残されたものの数さえ数えられれば十分だと見なす習慣も、私には気に入りません。私には、わが家の古来の慣習の方がずっと好ましいのです。わがアルベルティ家の人々は、ほとんど全員が、大した学者でした。⁴⁹⁾」

（3） Li. の説く幸福な家の定義と家を榮えさせるための4原則 (Bat. 相手)

「ああ運命よ、汝はわが一族に対して何と怒り狂い、執念深いことか。しかしこの苦痛のさ中に、私は心の中で最も人々からは是認されているあのエピクロスの格言に従っているのだ。つまり私は、記憶をもとにして自分を昔にもどし、我々の一族が人材豊富で、莫大な財産を有しており、

名声と権威とに包まれ、祖国で感謝と好意と友情とをほしいままにしていた、あの幸福の中に自分をおくのだ。このようにして、その幸福な思い出のおかげで、私は現在の不幸を埋め合わせしている。(中略) また私は、次のことを見て知っている。つまりそれは、かつて我々一同が豊富に恵まれていたものに欠けている一族は、つまりたとえばその一族の人数が少なかったり、貧乏であったり、卑しくて友人が少なかったり、うんと沢山の敵がいたりした場合には、惨めでありこの上なく不幸だとしか言いようがないということだ。だから我々は、人数が多く、富裕で、尊敬され、愛されている一族を幸福だといい、人数が少なく、貧しくて、汚名を負っており、嫌われ者の混っている一族を不幸だと見なそう。(略)

だから我々の論議において、そこから他のあらゆる理論が派生したり、あるいは追加されるための確固として最も安定した土台として、以下の4つの一般的原則を設けることができるだろう。私はそれらをまとめておく。家族においては、人数は減ってはならず、逆にふえるべきである。財産をへらしてはならず、逆にふやすべきである。あらゆる汚名を避けるべきで、良き評判と名声とを愛しかつ求めるべきである。憎悪、敵意、羨望を遠ざけて、知己、好意、友情を獲得し、ふやし、保持するべきである。⁵⁰⁾」

(4) Li. の説く結婚相手の選び方(同前)

「こうして青年たちが、老人たちや家中の人々の忠告や骨折りで結婚する決心がついたら、母親をはじめ、昔からの親戚の婦人たちや女友達の出番である。彼女らは、祖母の代から、土地のほとんど全ての少女たちがどんな慣習の下で育てられているかを知っているので、生れも育ちも良い娘たちを選んで、新しい夫となるべき青年のためにそのリストを差し出すことになるだろう。すると青年の方では、一番気に入った相手を選ぶべきである。一族の老人や年長者たちは、どんな嫁にせよ、醜聞や非難の種子になるおそれがないかぎり、拒否すべきではない。花嫁を満足させなければならない当人は、自分自身も満足させる必要があるのだ。さてその青年は、不動産を買おうとする際、何らかの契約を結ぶ前に、何度となくその物件を見直す良き家庭の父のようにすべきである。そうしたあらゆる購入や契約に際しては、後になってその買い物に悔いなくとも済むよう、無数の人々に聞いて回り、あらゆる努力を払って情報を得ることが望ましい。夫として一家を構えようとする者は、一そう勤勉になるべきである。彼は私の忠告に従い、終生ずっと自分がその夫および伴侶となるべき相手を、無数の仕方吟味し、予想すべきである。彼は2つの理由から妻をめとるのだということを念頭におくべきである。第一に子孫を絶やさぬため、第二に生涯にわたって、しっかりと変ることなき伴侶を持つためである。それ故、子供を生むのに適しており、永遠に共にいても好ましい相手を得るように努めねばならない。

このことから、妻をめとるには器量と親戚と財産を求めるべきだといわれることになる。(略) 同様に、私は女性の器量が、単に顔の優美さや上品さだけで判断できるとは思わない。むしろそれは、立派な子供を君のために多数生んでくれるのに適した、均整のとれた身体によって判断できると思う。ある婦人の器量の中で、先ず要求されるものは、良き習慣である。何故ならたとえ

ば彼女が粗野で大酒飲みだったとしたら、たとえその容貌がどんなに美しくとも、彼女を美しい妻だと見なすような人は決してあるまい。一人の女性においてこの上なく賞讃すべき第一の習慣とは、慎しみと清潔さである。(略) 自墮落で不潔な女程、あらゆる点から唾棄すべき存在は他にないのだ。(略) またしつけの悪い女が正直であったためしが稀なことは皆知っている。(略) したがって花嫁において第一に求めるべきものは魂の美しさ、つまり良き習慣や徳性である。次に肉体にあっては、単に美しさや優美さや科(しな)などだけを楽しむべきではなくて、むしろ子供を生むために適した丈夫な体格をしていることを求めるべきで、頑丈で丈夫な子供をえるのに十分ふさわしい身体つきの妻を、家庭内に得られるようにすべきなのである⁵¹⁾。」

(5) Li. が説く職業の選び方(同前)

「どのような行動がより必要であるかを知るには、次の2つの事柄をわきまえる必要がある。先ず、君の才能や知能や身体等々、君自身の内部にある事柄を調べることである。その次には、君が他人よりもより適していると思ったそれらの活動において、必要かつ有益なあの援助、支柱、支えについて考慮し、また必要な折に何が利用でき、その量はどの程度でどれ位までは自由が利くかという点についてよく配慮すべきである。一つ仮定してみよう。ある人が軍事に従事しようとした場合、自分が非力で、あまり丈夫ではなく、それほど労苦に耐えるのが得意ではなく、汗をかきつづけたり、ほこりをかぶったり、戸外で日に照りつけられることが我慢ならないと感じたら、軍事は彼に適した活動ではない、もし私が貧乏なくせに文学に従事しようとし、文学研究のために少なからず必要な出費を十分補給できるだけの財産がないとすれば、その仕事は私にむいていないのだ。⁵²⁾」

「そして怠惰でなく、また特別いじけてもいない精神ならば当然そうだろうと期待し望むように、それによって第一人者たらんと汗を流し、またたとえ第一人者でなくとも、無視され見すごされてしまうあの其他大勢の地位から抜きん出て、せめて一流の人々の仲間だと見なされるために全面的に努力し、全力と全才能を傾けて、何らかの名声や讃辞を求めようと苦闘することこそ、大変有意義だと私は思う。名声を得るためには徳(virtù)が必要であり、徳を得るためには、ひたすら君が人にそう見られたいという姿に、ただ単に君がそう見せかけることよりも、むしろそうろうとすることが必要なのである。それ故徳性にとっては、ほんのわずかなことしか必要でないといわれている。君もわかる通り、ただ確固として、万全な、見せかけでない意志があれば十分なのだ。⁵³⁾」

(6) Gi. が説くあるべき農園の姿(Li. 相手)

「そこで私は、(先祖たちの農園と)同様にその土地が、先ず我々に家族全員を食べさせるのに必要なあらゆるものを与えるくれることが可能であり、全てとまではいわなくとも、せめて最も必要なもの、パン、ぶどう酒などをまとめて与えてくれるように配慮したいものである。またその土地へ行く途中、もしくはその近くに、牧場を手に入れたいものだ。それは往復する途中で、そこに何か欠けていないかに気を配り、こうして常にその道を通りながら、あらゆる畑と土地

とを点検するためである。⁵⁴⁾」

「だから私は、そこでは良い土地と同様、良い空気をも求めたいのだ。空気の良い所では、果物はたとえその広さなら当然採れるほどの量が採れない場合でも、そこで採れた果実は、他の土地のものに較べてずっとおいしいのだ。さらにまたこの良い空気は、君がその別荘に引き籠った時、健康を大いに強め、君に無限の喜びを与えてくれるという事実を追加したまえ。またリオナルドよ、私は果物や収穫物を、余り長い間運ばなくとも私の所に届く場所で、その土地を得たいものだ。あまり町から遠すぎない所でその土地が得られたら、私は本当にありがたい。何故なら私は一そうたびたびそこへ出かけて行き、また人をやるだろうからで、使いの者は毎朝、果物、野菜、無花果を得るために出かけて行くだろう。また私自身も、身体の鍛練のために散歩に出かける。するとあの働き手たちも、私の姿をたびたび見るので、滅多に過ちを犯すまい。またこのことによって、彼らはより一そうの愛と尊敬とを私に対して抱き、ますます勤勉に仕事と取り組むだろう。こうした空気が良くて、洪水と無縁であり、町に近く、パンとぶどう酒の生産に適している土地ぐらい、ふんだんに見つかるだろうと私は思う。また植樹は、わずかの間にうんと豊富に行うだろう。というのも、私の持物でないとなりの土地が陰になるよう、私は周縁部にこうして休みなく木を植え続けるだろうし、しかもあらゆる種類の優美で珍しい果樹もそこへ植えようと思っているからだ。⁵⁵⁾」

(7) Gi. が説く人を傭う際の留意点と事業を進める心得（同前）

「先ず番頭の選出に関しては、可能なかぎり善良な番頭をえらび、次に何度も目をくばり、自分の財産を管理することによって、彼を不良化させないように熱心に配慮したい。また私の部下たちがより善良になる動機が得られるよう、彼らを尊重し、彼らに十分な待遇を与え、そして彼らが私と私の財産のために愛情をこめて努力してくれるようにしたいものだ。⁵⁶⁾」

「その点に関して、私は正直で善良な番頭を得るために念を入れたい。またその後で、私は非常にしばしば、ごく細かい事柄まで知り、見直すようにしたい。また時には、たとえ私が知っていたとしても、より細心らしいふりをするために、改めて私はたずね直したい。私は自分があまりにも疑い深く不信感を持っていることを示すためではなくて、番頭が勝手に過ちをおかさないためにそうするのだ。もし番頭が、何一つ私の目から隠されていないことを見たら、私に対して気をくばり、真実を語るだろう。たとえその反対を望んでも不可能だろう。何故なら、私が万事をたびたび監督していさえすれば、過ちが私の目の前でくり返されることはありえないからだ。また何らかの過失がたまたま生じたとしても、今日中といわないまでも、明日にはもう見出され、一定の時間内にはきちんと正されてしまうだろう。もしも何らかの悪意によって、何事かが隠されていたとしても、くまなく深しまわり、追求することによって、容易に見出すことができる。

(略) メッセル・ベネデット・アルベルティは、商人は常にその手をインクで汚しているのが良いといっていた。⁵⁷⁾」

第五章 危機の表現としての『家族論』

たとえば第三部⁵⁸⁾の中で、Gi. と Li. とが公職参加の是非について論争しているが、このように対話者たちの考えが一致を見ない場合も生じうる。だからある程度は矛盾した意見をも含めたまま、本書が求めている「家」像を大まかにまとめて見ると、次のようなものになるだろう⁵⁹⁾。

1. 本書では、「家族とは（父親にとって）子供、妻、その他の親戚、従者、召使⁶⁰⁾」と定義されているように、「家」は父親と妻子以外に、親類縁者や使用人等を含めた概念であるが、それは人数が多ければ多いほど良いと見なされている。なお Gi. と Li. は共に、「家」を分割することをきびしくいましめている。また儉約や、勢力確保のため、一家はまとまって住むことが望ましいと考えられている。父の任務の最優先事項は、「家」の人数をふやすよう、決して減らさぬようにすることだと規定されているので、健康への配慮が何よりも先ず求められている。こうした指針から考えて、本書の主張は大家族主義と見なすことが可能だろう。

2. 「家」は余り都市から遠くなく、空気が良くて健康に適しかつ安全な所に広大な土地をもち、その土地でパン、ぶどう酒、果物、肉等々、日常の必要物資をほぼ自給自足できることが望ましいとされている。財産は貨幣の形で持つだけでは危険なので、より安全で堅実な不動産に投資すべきだとも勧告されている。ただし郊外のみで生活することは、子弟の教育に差支えがある（たとえば悪人を知らずに育つ心配がある）ので、市内にも邸宅を構えて、半々に暮らすことが望ましいとされる。このように、本書では、できれば自給自足すべしと説かれている。

3. ただし衣類までを完全に自給自足することは仲々困難だし、他にも出費が必要なので、そうした出費を補うために堅実な事業を営む必要を認める。望ましい事業は、羊毛、絹の加工、あるいは商品の売買などで、また金融業も決して非難すべきではないとする。事業は常に勤勉に努めて正直本位、信用第一に行うべきだとし、その際必要に応じて人を備えば良いが、その人物は、できれば同族の者が望ましいと説く。

4. 「家」の成員の関係は平等ではない。妻は夫に服従すべきであり、老人や年長者の知恵や経験を尊重しなければならないとする。長幼の序にもとづく礼儀を厳守させることを勧告する。男女は分業で「家」の経営に協力することをすすめる。夫は外で事業を営んで金もうけに当ると共に、公職などにも参加すべきだとする（ただし Gi. は公職参加を公的な隷従とか狂気と呼んで否定する）。妻は内を分担し、家族全員の世話をすると共に、夫が得てきたお金や財産の監視を行うべきだが、夫は妻に書類や帳簿を見せたり、秘密をもらしてはならないとする。妻は夫のことを知りたがってはならず、書斎に入ることすら許されない。夫が妻に語ることが許されるのは、儉約、習慣、子供に関連のある事柄だけである。しかし夫は妻に自分の方針を十分理解させておかねばならず、そのためには教育すべきだとする。

5. 乳幼児の時期の世話は、母親に全面的にまかすべきで、父親が手を出すとかえって危険だと忠告し、乳児には、特別な必要がないかぎり母乳を与えるべきだとする。しかし男子は可能な

かぎり早く、男たちの中で訓練すべきであり、女たちの中で育てたり、孤独の中で閑暇や怠惰になじませてはならないとして、幼児期からのきびしい訓練の必要を強調する。子供の教育は父親が担当するのが望ましいとし、どうしても無理なら教師にたよるしかないが、とに角子供は親のやり方次第でどのようにでも育つものであり、特にしつけと訓練が重要であると説く。何よりも学問を優先すべきであるとし、それ以外では、体育、特に馬術、弓術、まり遊びなど、武芸や高貴な遊戯が望ましく、座ってやるゲームは感心できないとする。子供の職業選択においては、その適性と、財産等の周囲の状況とを考慮すべきであって、適した職業を選び、その分野で一流たるべく努力させ、才能の持主に対しては、可能なかぎりそれを伸ばしてやるのが一族の義務であると主張。またいかに恵まれた境遇にあらうと、運命の急変にそなえて、子供には職業訓練を施しておくべきであるとする。

6. 一族の人数をふやすために、独身の青年には、経済的援助や、遺産相続に関係した強制などによって、妻帯させることをすすめる。Li. は男子の適令期は25才だとする。結婚相手の選択は、相手自身（その器量その他）、相手の家柄、持参金の順に考慮してきめるべきであるが、相手の家柄が高すぎても低すぎてもトラブルの原因となるので、なるべく対等の相手との縁組が望ましいと見なす。持参金は多少少な目であっても即金でもらえという。

7. 子供のいない夫婦は養子を取るべきだとし、一夫一婦制は厳守すべきだとして、離婚することも許さない。養子は血筋、気質、容貌などがすぐれ、しかも家族に嫌われていない者を選べとすすめる。養子を可愛がらないと怨みを招くと警告。

8. 事業の使用人や家庭内の召使の仕事ぶりは、常に監視を怠ってはならず、仕事の配分を良く考慮して、怠けさせないようにし、末端まで勤勉に目を光らせて、不正を許すなど説く。クモが巢の隅々まで見張るようにすべきであるとし、隙を見せることをいましめる。

しかし、家庭内の召使に対しては、上質なパンやぶどう酒や衣服を十分支給するようすすめる。またもし彼らが病気した場合には、十分手当して早く治す方が経済的だとする。さらに立派に働く召使には、上等の衣服をほうびに与えて、ほかの召使をも刺激すべきだとし、事業の使用人にも立派な待遇を与えて、愛情を持って精を出してくれるように配慮すべきだとする。

9. 子供を叱る時は冷静でなければならない、もし主婦の命令に服さぬ召使がいても、大声を張り上げてはならない。取り乱すよりほおっておく方が良いとする。外部に対して取るべき態度も同様で、敵意を持った相手がいても、こちらから残酷な行為や卑劣な振舞いに出て、敵意を決定的なものにしてはならないと説く。一家の父は、若者が無暴な行為、特に復讐（ヴェンデッタ）などに走らぬよう、よく見張って、常に冷静に行動するよう指導すべきである。また日頃から、他人の反感を買わぬよう一族は尊大な態度や華美を避けるべきだとする。

10. 宗教については特にくわしい記述はないが、子供の心の中に神を敬う気持を植えつけるべきであるとされる。また子供の精神修養を重視して、財産を残すより、貧困に耐えることができる気質を与えることの方が重要だとされ、ストイックな習慣を身につけよという勧告がなされて

いる。本書で信奉されている信条を明確に規定することは困難だが、カトリック信仰と、徳の完成を目指す哲学的倫理（それは自然への信頼をも含む）とが一体として受け入れられているといえるだろう。

以上の諸項目を眺めると、我々はいくつかの特質に気がつく。それらを列挙してみよう。

㊤ ここには、当時のイタリア各都市の商人たちに共通している、地主化もしくは小領主化の傾向が極めて顕著にみとめられる。Gi. は単に土地を買えとすすめるだけではなく、日常品の大部分を自給自足せよとさえ主張する。それは結果として、封建的小領主に似た存在を生むであろう。元来イタリアの大商人にはそうした階級の出身者が多いので、一種の先祖帰りともいえる。アルベルティ家の場合もまさにそうで、事実、かつてそういう生活を送った先祖が理想と見なされている。当然これを後向きの姿勢と見なすことも可能である⁶¹⁾。

㊦ しかし単なる商業上の不安定のみならず、祖国からの追放という事情が加わったアルベルティ家では、「家」防衛の意識はさらに鮮明となっていた筈で、そこでは「家」そのものをさらにきびしく組織化し、秩序づける必要があった。Gi. はしきりに勤勉によく見張れと説くが、父親を頂点として、組織化され、統制され、出費を十分点検して、「家」全体が儉約を実行する姿が理想のものと見なされている。

㊧ さらに祖国の権力構造から排除されたアルベルティ家は、支配層の一部だったころ以上に純粋に上層市民層としての階級的自覚を持たねばならなかった。彼らには祖国の保護が全く及ばぬため、独自に身を守っていかなければならなかったが、失うべきものが何もない放浪者の群とは違って、彼らには2世紀余り当代一流の富豪だったという歴史的事実があった。そのため上は王侯やその取り巻きに対しても、下は使用人や農民に対しても、不信感や断絶感を持たざるをえない。しかし彼らはいたずらに孤立に悩むことなく、上に対してはその見事な才覚によって交友を結び、下に対しては温情ときびしい監視というアメとムチで対応することによって道を開く。ルネサンス期の上層市民の階級意識が鮮明に表現されている点でも、この作品は貴重な記録だといえる。

㊨ さらに注目すべきは、本書には「家」から我々が通常家庭という言葉から感じる情念的、心情的な要素を、薄め、かつ払拭しようという意志が感じられるという事実である。そこでは母一男子の関係は、乳幼児期を除くと、父一男子の関係よりもずっと影が薄い。作者自身早くから母の許を去り、また聖職者となって自分の家庭を持たなかったことも影響しているかも知れないが、この「家」像における子供は、学校の生徒に似たような、文化の習得者という機能的役割りを主体として描かれている。またここでは血のつながりそのものもそれ程重視されず、養子が奨励される。またペスト等の時は危険を冒して世話をする必要はなく、医師と薬を与えてやるだけで十分だという勧告などにも、その非情な（しかし理性的な）側面がうかがわれる。当然恋愛などは狂気としてしりぞけられ、いくつかの「家」を危地に追いこんだヴェンデッタなどは断固として禁止される。作者は、「家」からその毒を抜こうとしているともいえるだろう。

㊩ 今まで見て来たのは、どちらかというと消極的でもっぱら防御的な危機への反応であるが、

本書における積極的な対応策として、最も力説されているのは、子弟の教育である。一族の学問的伝統は改めて意識され、学問こそ嵐の中を生きぬいていくための最高の手段だと自覚されている。ここには「家」の危機は個人の訓練によって克服できるという信念が感じられる。対話者の1人 Li. の教育によせる信頼は非常に強いもので、子供は親の訓練次第で何とでもなるのだとさえ述べる程である。さすがに経験者の Adv. はこれに懐疑のことばをなげかけるが、教育の成果に対する楽観的な確信こそ、本書に一貫した基本的な立場と見なしうるであろう。

このように見る時、本書では「家」そのものの経済的基盤を固め、その内部の統制を強めると共に、持てる者として階級的自覚を持って事態を切り抜けることをはかっており、同時に「家」の存在を危地に赴かせかねない心情的要素を排除するなど、「家」そのものを再構築する試みがなされる一方、特に子弟の教育に力を入れて、人材養成によって危機を切りぬけようとしているといえる。第一章で作者は「家」の危機と個人の危機を重ね合わせて見たことを述べたが、危機への対応策も、大きくみるとこうした「家」の再建と個人の形成という二段構えを取っていると思えることができるであろう。作者は、自分の一族の運命について、しばしば対話者の口を通してその不運をなげくが、基本的には楽天的で、「自然」ということばを何度も用いている⁶²⁾ことによっても分る通り、自分の楽観的信念が「自然」にもとづく無理のない妥当なものであると感じている。また「家」に関してはどちらかというと消極的、防御的で、儉約を中心とする意見が主流だが、個人に関しては、より積極的で、信念が強く、希望に充ちた意見が多いようである。ようやく祖国に帰国しえただけのアルベルティ家と、古典や古代芸術の研究という巾広い活躍分野を目前にした作者自身という、執筆当時危機を脱した「家」と個人の状況の違いがこうした筆致に関係があったと見ることも可能である。だから後代でも「家」の部分は記録として、個人の部分は教育論として読み取る傾向が強いといえるのではないだろうか。

注

- 1) Leon Battista Alberti, *I primi tre libri della famiglia*, testo e commento di F. Pellegrini, riveduta da R. Spongano, Firenze, 1946 (以下サンソーニ版と略す) の p. XLVIII (Brevi cenni biografici 所収)。
- 2) 本書における引用その他は一切この版によった。L. B. Alberti, *I libri della famiglia*, Torino, 1969, a cura di Ruggiero Romano e Alberto Tenenti. なお、L. B. Alberti, *Opere Volgari I*, Bari, 1960 所収の *I libri della famiglia*, a cura di Cecil Grayson も参照した。
- 3) アルベルティ家とパドヴァの関係については、R. Cessi, *Gli Alberti di Firenze in Padova*, in *Archivio Storico Italiano*, s. V, XLIII, pp. 233-84 (ただし後半 documento), 1907にくわしく論じられている。
- 4) 作者の伝記としては、G. Mancini, *Vita di Leon Battista Alberti* (seconda edizione completamente rinnovata con figure illustrative), Roma, 1967 (ただしその初版本は1882年に Firenze で刊行され、今日でも権威のあるものとされている) および、G. Semprini, L. B. Alberti, Milano, 1927, その他の記述によった。
- 5) L. B. が、一族によって父の遺産を奪われたことについては、G. Mancini, op. cit., pp. 52-54, G. Semprini, op. cit., pp. 29-30, またその苦しい青年期の作品への反映については上記の伝記の該当箇所(ページ数略)や、Enrico Aibel, *Leon Battista Alberti e i libri della famiglia*, Città di Castello, 1913, pp. 27-30 等に記されている。残念ながら未読であるが、“*De commodis litterarum atque incommodis*” (L. B. Alberti, *Opera edita da Hieronimo Massaio* (1500?) tradotta da Cosimo Bartoli, opuscoli morali di L. B. Alberti, Venezia, 1568) と題する小品が書かれたという事実自体が、彼の学究生活の苦しさを物語っているようで

ある。

- 6) 以下の伝記的な記述はいろいろ問題を含み検討を要するが、本論の範囲を超えるので一々指摘しない。注4)および注1)その他の資料によっている。
- 7) Gasparino da Barzizza, (Mancini の表記) は, Gasparino Barizza (Cessi) とも, G. da Barsizza (Aubel) とも表記されているが, 作者の一家との関係は, Cessi, op. cit., pp. 244-46 で明らかにされている。
- 8) 注5)参照。
- 9) Enrico Aubel, op. cit., p. 29.
- 10) Dizionario critico della letteratura italiana, Torino, 1974, Vol. I., p. 11.
- 11) G. Mancini, op. cit., p. 16.
- 12) Ibid., p. 89.
- 13) F. Tateo, 《Dottriana》ed 《esperienza》 nei libri della Famiglia di L. B. Alberti, in Tradizione e realtà nell'Umanesimo italiano, Bari, 1957, p. 207.
- 14) L. B. Alberti, op. cit., p. 12.
- 15) ibid., p. 4.
- 16) ibid., p. 4.
- 17) 注1)の I primi tre libri 所収 Brevi cenni biografici p. XLVIII.
- 18) ibid., p. XXXIII.
- 19) ibid., pp. XLVII-XLVIII.
- 20) L. B. Alberti, op. cit., p. 155.
- 21) 注17)と同じ p. XLIII.
- 22) ibid., p. XLV.
- 23) 学問と経験主義との対立は、本書の重要な問題の1つだが、注13)の論文その他によって何度も論じられている。
- 24) 注17)の brevi cenni には何故か Pi. についての記載がないが、生年は、注1)の同書所収の系図に記されている。
- 25) L. B. Alberti, *The family in renaissance Florence, a translation by Renée Neu Watkins*, I libri della famiglia, Columbia, 1969, p. 15. なおこの英訳本には、Interlocaters and Their Special Themes という一章があって、やはり登場者とテーマを簡単に解説している。
- 26) Gi. と Pi. とのやりとりは、L. B. Alberti, op. cit., p. 339 と p. 345. Gi. が年少者に、Adv. や Li. が Gi. に話しかけている例は第三部に無数にある。Li. が Pi. に話しかけた例は p. 327.
- 27) Li. から Adv., Bat. から Li. へのことばは、それぞれ第一部と第二部に無数にある。
- 28) たとえば、最近の英訳本 L. B. Alberti, *The Albertis of Florence—Leon Battista Alberti's Della famiglia*, translated and with an Introduction and Notes by Guido A. Guarino, New Jersey, 1971 所収の Notes to Book III でクセノポーンの手紙との関係が具体的に指摘されている。また E. Aubel, op. cit., Appendice II, pp. 105-110 がこの問題を扱う。
- 29) L. B. Alberti, op. cit., p. 28 および p. 202 で、Gi. が仲々腰をおろさぬ Li. 等にかけてさせる。
- 30) F. Tateo, op. cit., p. 289 などともそうした性格を指摘する。
- 31) 注25)参照。
- 32) 注28)参照。
- 33) Donato Velluti, *La Cronica Domestica* のこと。拙稿「ドナート・ヴェッルーティの『家族年代記』について」(Ⅰ)(Ⅱ)(本学『学報』No. 46, No. 51 所収) 参照。
- 34) Giovanni Morelli, *Ricordi* のこと。
- 35) 注25)および28)参照。
- 36) L. B. Alberti, op. cit., p. 41.
- 37) Ibid., p. 172.
- 38) Ibid., p. 303.
- 39) Ibid., p. 336.
- 40) Ibid., p. 178.

- 41) Ibid., p. 172.
 42) Armando Saponi, Gli Alberti del Giudice di Firenze, in Studi in onore di Gino Luzzato, Vol. I, Milano, 1950, pp. 161-92.
 43) L. B. Alberti, op. cit., pp. 218-25.
 44) たとえば Enrico Aubel, op. cit., p. 57.
 45) L. B. Alberti, op. cit., p. 120.
 46) ibid., p. 228.
 47) ibid., pp. 20-21.
 48) ibid., p. 58.
 49) ibid., pp. 82-83.
 50) ibid., pp. 124-25.
 51) ibid., pp. 131-32.
 52) ibid., p. 163.
 53) ibid., p. 168.
 54) ibid., p. 238.
 55) ibid., pp. 240-41.
 56) ibid., p. 252.
 57) ibid., p. 250.
 58) なお第三部に関してはほぼ同時代人 Agnolo Pandolfini (1360-1446) が、その部分だけを、“Governo della famiglia”として発表。作者をめぐる、後世に問題を生じさせた。E. Aubel, op. cit., Appendice I, La questione Leon Battista Alberti e Agnolo Pandolfini でその問題が解説されている。
 59) 以下の記述の出典は、挙げ出すときりがないので省略する。
 60) L. B. Alberti, op. cit., p. 226.
 61) Ruggiero Romano は L. B. Alberti, op. cit., の序文（同著者の Tra due crisi; L' Italia del Rinascimento, Torino, 1971, pp. 137-68. に再録）でこの書を歴史学の立場からどう読むかを論じている。極めて興味深い問題がいくつか指摘されているが、本書の内容の紹介を目的にしたこの論文ではとても十分に触れることができない。
 62) 注 28) の英訳本の index では、nature の関連箇所が15挙げられている。
 (本論は昭和57年度文部省科学研究費一般研究(c)の補助金による研究の一部である。)

別表 アルベルティ家の系図（下線付きの人物が対話者）ただし注1)のサンソーニ版の附録による。

